明治卅六年四月五日第三種郵便物認可　毎月一回一日發行　價八錢

家庭雜誌

第五巻
第八號

明治四十年六月一日發行

Dai 5 Kan.　KATEI ZASSHI　Dai 8 Gō.

變化……堺利彦……一
非墳墓論（下）……若宮卯之助……二
お別れ……大杉榮……五
雜感雜記……大石祿亭……六
耕作……上司小劍……八
婦人解放の第一歩……深尾韶……一〇
落髪……德永狂風……一三
トマトー料理……山田嘉吉……一三
雲と小供……しらぬ火……一四
新刊紹介……記者……一五
電柱の貼り札……木……一六
菜食主義博覧會……記者……一九
下女下男の給料……記者……一九
何故に結婚する乎……中尾清太郎……二〇
妹の墓……張翁……二三
喜劇 貧民長家……堺利彦譯……二四
ローマ字欄……深尾韶……三

家庭雜誌社
東京府下新宿淀橋町柏木三百四十二番地

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

石鹼と洗粉は
何れが好きか

●壹圓の舶來石鹼よりもクラブ洗粉は衛生美身術に適合す

●幾百種の洗粉の中にてクラブ洗粉のみは石鹼以上の特點あり

●クラブ洗粉は御婦人方は勿論紳士方の愛用もまた盛なり

●クラブ洗粉は各地の信用ある呉服店及び小間物店化粧品店にて販賣せられつゝあり

神戸市花隈町間ノ踏切上ル本店
大阪東區北久太郎町四丁目御堂筋角支店
中山太陽堂

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌

第五卷第八號

變化

彦

◎朝早く起きる。風がそよ〳〵と吹く。漸く日の出となる。一天晴れわたつて八方に光がさす。

◎何處となく花の香もする。そこ〳〵に鳥も啼く。日永く晝靜かにして何時しか午時となる。

◎雲ありて忽ち中空に蔽ひかぶさり、電光凄まじく閃き、雷恐ろしく鳴りはためく。やがて雹まぢりの大粒の夕立來る。引續いて二時間ばかり篠つくばかりの大雨となる。

◎荒びの勢ひは一轉して風となり、蓬々として木を動かし家を震はす。雨はケロリと止む。日は漸く暮れる。

◎夜に入りて風も亦た止み、洗ひ盡されたる天地の間に、半圓の月一輪。幽かなる虫の聲など庭の隅に聞える。

◎こんな生涯があつたら嘸い〻だらう。

非墳墓論（下）

若宮卯之助

五六尺もある溝を越すには、直に溝の縁に立ちて力を致するよりも四五間先より驅けて來て惰性を利する方が便利であるが如く、一個の問題を解くにも遙かの遠景を借り來りて歴史的縁由に據れば却て眞意義を得ることが容易である。予は此の理由によりて少しく墳墓の變遷を考へてみたが、更に方向を轉じて墳墓の未來を論じて見やう。

近世の事に通せざる者が如何にして過去の事を解することができやうかといふのは一應道理の在ることではあるが、然し動ける現在の觀察は靜まれる過去の夫れに比して困難なる場合がいくらもある。假令ば死に對する觀念の如きも其一例で、過去の事は如何に不完全であるにもせよ、傳はりたる證據のみを證據として過去の人は斯く〳〵考へたりしと論斷し得るが現在の事はさうは行かぬ。同一の人に於てすら時々思想の變

化もあれば、まして人の心の同じからざるは其の面の異るよりも更に大に甚だしいのであらうと思ふ。

されば現在の人の死に對する觀念、墓に對する思想はしか〳〵也と推定するは甚だ無理なことで、つまりは一種の獨斷に陷ることになる。予は此の如き獨斷を避ける爲め、下の如き假定を設けることにした。即ち（一）今日にても尚は四五千年前の埃及人と類似の思想を有する人もあれば、（二）又此の舊思想より解脱したる若くは解脱せんとしつゝある人もあろふ。この二種の人の共存を認むることは明かに便宜であるし、また決して事實を距るものでないと思ふ。短くいへば世には本能によりて動く人と、理性によりて動く人々がある。一切の改革論は本能的動物に全く無用であるが如く、此の非墳墓論も實は理性によりて動く人を初手として説くのである。

今日の社會狀態を粗らくいへば、個人的意識ありて社會的意識なき時代である。されば此の社會的盲目の時代に在りて社會意識を基本とする改革論を唱へる者

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

は、動もすると直に異端と看做さるべき傾向がある。大雪の朝、荒道を行く者に不利の伴ふが如く、一世の知慧に先つ者は決して一代に輝き得るものでない。今日に於て恐くは人の一笑にすら値せざるべき非墳墓論も、久しい間には必ず一個の卓見たる事を證明する時代が來るであろう。これ余の固く信ずる所である。

何づれの時代にても多數は慣はしの僕であり、仕來りの奴である、今日の墓なる者も多くは社會的隋性の力で維持されて居るので、物のわかりさうな人物に就いて試に墓の起原發達をたづねて見るがよい。彼等は殆ど適當な答を與へ得ないではないか、已に起原、發達に就いて何等の知る所がない、されば之が未來に對して意識的方法を施さうとするが如きは思ひも寄らぬ所であらう。

墓によりて死者の靈を慰め得ると考ふる人は、前にも斷りたるが如く、今は予の眼中にはないのだが、身ばかり人の紀念として其人も追慕の情を表はすことは、予は寧ろ或意味に於て奨勵すべきことと思ふ。人

過去あるによりて今日あるので過去を輕んずるは則ち現在を輕んずることとなる。然しこれは終に朽つべき枯骨とは何の關係もないのである、或は墓により或は位牌によらざれば、其人を紀念することができぬといふは、餘りに幼稚な考へであつて、目に見ゆる物の外は容易に意識に上ぼせ得ない野蠻人にも劣るのだ。

人間の社會はまだ用と不用とを以て、事物を判斷する唯一の標準としてよい程には進んで居ない、されば墓は無用であるが故に廢止すべしといふは決して適當なる理由とはならぬ、廣々と込み入つて居る社會にはまだ〳〵無益無害の存在物を容るゝに足る餘裕があり檢查濟みの印紙を貼つて沽客に媚びる賣藥のみがそれといふ次第でない。しかし墳墓の存在によつて社會の蒙る害惡を認むることができたならば、非墳墓論はこゝに嚴肅なる根據を得るのである。

今日地方を旅行すると、鋭き觀察家の見逃がすことのできぬものゝ一は、實に葬儀の壓制である、考へてみれば只無意義である此の葬儀の虛禮が、往々にして

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA

一家の產をも覆すことのあるのは決して珍しき事實でない。而して其被害者の多くが此迷信の桎梏を解脱し得るだけの智見を缺く者なるを思ふときは、悲慘は更に其度を增して來る。然し葬儀の壓制は素より壓制たるに相違はないが其の性質は要するに一時的のものである。けれども墳墓の壓制に至りては、其性質全く永久的であつて從て人の心に映ずることも亦自ら深いのだ。墳墓の壓制を說く前にあたりて、予はこれと類似の一例を擧げて少しく讀者の注意を乞はねばならぬ。

予は曾て伊豆の修善寺に遊んだことがある。其所謂修善寺より一里程上ると弘法大師即ち御大師樣を安置せる奥の院といふのがある。此の一里程の山路を『いろは』四十八字に別け、一字一基の知るべ塚が修善寺に始つて奥の院に終つて居る。此の塚の施主は東京は日本橋の高橋某といふのである。予は當時此の知るべ塚の「い」の字を見たとき、圖らず一種のファンタシーに驅られ、考へ〳〵奥の院まで上ぼりつめた。成る程此の塚は殊勝なる高橋氏の宗敎的本能を滿足させたであ

らう。石工は之に由りて職業を得たであろふ。寺院は之によりて光榮を增したであろふ。人足はこれによりて一時の駄賃を得たであらう。然し此の知るべ塚の永久の結果を考へると、予は一種の疑惑を懷かざるを得なかつた。一筋途に於ける此の塚は無論目あきには無用のものである。そして目なしには尙更無用のものである。若し此の費用を轉じて小綺麗なる長屋の建築に投じたならば建築に關係ある人間は職業を與ふる事は知るべ塚と同じであるが、永久の結果は大に異りて、人に生活上の慰安を與ふることになる。考へてみると社會の罪惡の多分は富の生產からでなく、分配からでなく、實に富の濫用より來るのである。社會が富の消費に就いて公正なる概念を得るまでは社會改革の多分は先づダメといつてもよい。されば予は非墳墓論は主として富の消費の關係の上に立つのである。

年々我等が靑山や谷中や其他の墓地に費す所を少しく想像するがよい。更にこの費用を人生の福祉を增すことに投じたならば如何なる結果を持ち來すか、更に

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

深く想像するがよい。所有財產を質に置いてまで人はなぜ葬義を營まねばならぬのか、高利貸の壓制を受けてまで人はなぜ墳墓の壓制を受けねばならぬのか。富める者が頗る念の入つた仕掛をして、遂には打つべき骨の保在に力むることを看る度毎に―予はいつも富の濫用に戰慄する。一個の墓を建る爲めに三十年間三ヶ月交代に十萬の平民をたゞで使うたのは埃及王クーフーである。觀光の爲に埃及を過ぎる者は今に尙三角塔の雄大を嘆美し、其の技巧の精緻を推賞するが、バックルはそのブリヽアントなる文明史の序說に於てこれ當時の人民の疲弊を證するものなることを痛論して居る。スペンサーはその飾りなき自叙傳に於て、此の壓制の紀念を觀て彼が埃及の風光より得たる一切の快樂を去りて、却て一種の無限の悲愁を感じたというて居る。これ實にインサイトある天才者にして始めて道破し得る所である。然し彼等の天才を以てして、當時日常目の前に於る墳墓壓制に念到せざりしを思へば、我等の如き微にして小なる思想家も亦必ずしも失望すべき次第でない。

お別れ

大杉榮

讀者諸君の中で、平民新聞をお讀みなさらなかつた方は、多分御存じもありますまいが、私、つまらん筆の禍の爲めに、當分諸君とお別れをして、そして監獄に行かねばならぬのであります。

それは、嘗て平民新聞に記載したクロポトキン翁の「青年に訴ふ」といふのが政府の忌諱に觸れたので、先月の末に東京地方裁判所で、秩序壞亂の廉とかによつて輕禁錮一ヶ月半の宣告を下されたのであります。

けれども、其の當時少しく遣りかゝつてゐた仕事があつたものですから、せめてこれを終るまで入獄の日延をして戴かうと思ひまして、早速控訴の屆出をして置きました。

所が二三日前にやうやく其の仕事も終りましたので、又早速裁判所へ出掛けまして、先きの控訴を取り下げて參りました。すると、今日端書が來まして、二十九日の午後二時に刑の執行をするから出頭しろといふのであります。致方がありません參りませう。

そして一ヶ月半を經る間に、もう一つの今大審院で審議中の「新兵諸君に與ふ」事件の方も何とか片がついて、そして其の刑期が又之れに加つて、早くとも八月の上旬までは其處に勤めてゐねばならぬ事と思ひます。之れも亦致し方がありません、神妙に勤めませう。

けれども一つ私の胸をいためますのは、此の二つの新聞の編輯兼發行人であつた、石川三四郎君と山口義三君とが、僕と連座して、しかも僕の刑期を二倍されて、同じく獄につながれねばならぬ事であります。

僕の不在中は、家庭雜誌の編輯を堺兄に御頼みしました。之れは御安心を乞ひます。

終りに臨んで、諸君の健康を祈ります。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雜觀雜記

綠亭生

▲大根を好きな神樣

余が家を距る事僅かに四五町、音無川に沿へる御船の村に牛鼻神社と言ふ氏神があつて、毎年舊暦の二月と三月とに祭禮を行ふ。此お祭りも昔は餘ほどよく賑ふたものであるが、今は世の進歩に添はぬ百姓が田の神牛の神として參詣するのみ、甚く淋しきものと成り果てた。此春余は計らずもその祭禮の日にそこを通りあひて見るに、禮拜者は大方質朴な農夫ばかりで、當世の紳士淑女など云ふものは一人も見當らぬ。特に嬉しく感じたのは短かき羽織を着た百姓が、目のさめるほど立派な大根を神前へ捧げた事である。彼等の態度は學校先生が御眞影の扉を開く時ほど氣取りはせねど、其無邪氣な處に自ら敬神の誠意が現はれて居る。但ゞ無くもがなと思ふたは郡長閣下參拜の代理として派遣せられた洋服に勳章の官吏殿である。大根を好き

な神樣は斯んな奴を嫌ひ給ふに違ひない。

▲救世軍とおやまごと

余が幼き頃知れる人に、おやまごとと言ふを爲たものがある。それは我家を青樓に見立て妻の居間を娼婦の部屋に見立て、自分が客となつて其所へ遊びに來ると言ふ趣向である。これ恰も小供の飯事に均しく一時の戲れをして、無邪氣なりと言はゞ言ふべし、面白しと言はゞ言ふべし。されど斯の如き事は深く意匠を凝らせば凝らすほど卑俗となり、反復持長すればするほど醜陋唾棄すべきものとなるのである。

それとこれとは少しく事變れど、近頃世に持囃さるゝ救世軍と言ふものは、その編成を軍隊の組織に見立て、之に關する役員を將校參謀兵士などにあてはめ、關の聲を擧げ軍樂を奏してドンチャンとねり歩行く。之につき余は私かに思ふ、斯う言ふ化粧的な見立事は何か臨時の場合に餘興として行ふか、但しは際物師の仕事としてやるがよい。けれども斯んな事に拘泥して何時までも何處までも得々たるは、寧ろ剽輕なる滑稽

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

者流の業と言ふべく、何うしても眞摯熱烈なる宗敎家の仕事としては受取り難いではないか。

▲己れの欲せざる所

人間、特に金持の者共が病氣になつたり往生つたりすると、親類や近處の者へ非常に手數をかける。余は自分の死ぬ時など其んな餘計な世話をして欲しくないと思ふ。それで之を避けるには何うすればよいかと熟々考へた結果、己れの欲せざる所之を人に施す勿れと言ふ敎訓を見出した。而して自分から先づ他を粗末に不親切に取扱つて置く事だと思ふ。

▲お辭儀の動力

日本人はお辭儀をする人種とやら、特に何か儀式の時になると彼方へも此方へもヒヨコ〳〵と天窓を下げて、其數の多きを以て鄭重の尺度となし、之を受くる事の甚しきを以て榮譽の大なるものと心得て居る。斯んな無益の事に精力を費すは實に惜むべき話で、若しも彼等の頸玉に帯革でもまきつけて之を動力に利用したら、隨分デカイ機械の運轉が出來る事だらう。これを思ふても今の習慣や禮儀と言ふものは馬鹿げた所で贅澤をして居る事がわかる。

▲衣服の整理法

先日或雜誌に「我が實行せる衣服の整理法」と題して某夫人の談話を掲げて居たが、其人の主人は「日々洋服で出かけますから家で着る日本服は割に入らない方ですが」と前置をして、一月より十二月まで入用の着類三十五枚を擧げ、尙ほ「其外に外出用の質素な和服が單衣二枚」以下十一點を並べ立て、總數四十八を示して居る。これで割に入らない方ですがとはチト恐縮の至りであるが、兎に角それ程澤山あれば旨く整理が出來る事だらう。併し寒中に單物で顫ふて暮す貧乏人は何うしたらよいか知らん。

▲物騷な世の中

余が住める町を日毎物乞ふて歩行く一人の老嫗がある。其腰が甚く屈んで體軀が二つに折れた所へ大きな風呂敷包を着け、其の重さに耐えかねて折々息も切れんばかりになる。さうして此包は問はずと知れた彼が

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

所有品の全てゝ、彼は其身體と共に荷物の置場を此世に見出さず、夜も晝も之を携へて逍遙ひあるかねばならぬ。聖代の法律も彼れが此僅かなる財產を保護するの力もないのである。

尙ほ之に似たあはれなる話がある。それは余が家を折々訪れる『良家の夫人』であるが、何時も身には立派な衣服を纏ひ、天窓の飾りから携帶品の末まで謂はゆる五分も透かぬ扮裝である。然るに彼は絕へず多くの鍵を帶の間に挾み、何かの拍子に之を取落すことがある。是れは其內には長持挾箱の樣な古風な鍵もある、ツランクやカバンに合ふ樣な新式なのもある、手函や小簞笥を開ける樣な可愛らしいのもある。その數は凡そ二十の上もあるであらうが、全體此夫人は何の爲めに是ほどの鍵を持つて居るのか、彼は智くして人望ある夫を有ち善き舅姑に仕へ、多くの子女と婢僕に冊かれ、最も幸福な生涯を送つて居る人である。されどその溫き家庭も彼の心を十分許すに足らず、其所有品にも錠をおろして苟且の外出にも多くの鍵を持ちあるかねばならぬとは、餘りに情なき事ではないか。余は之を前の老嫗に對比して、今の世は富めるものにも貧しきものにも至極物騷な世の中だと思ふ。

耕作

上司小劍

（一）

農夫の顏は何故あんなに險惡なのであらう。農夫に人相の優し氣なのは一人も無い。眼の玉がドンヨリと曇つて、一寸見れば愚鈍のやうであるが、曇つた眼の玉に、底光りがして、『あの人達ア乃公さアをはアだましに來だんべえ』、と云つたやうな風に都の人を睨む。

（二）

自然の大景色に抱かれて、淸い風に吹かれ、淡い霞を吸ふて、雲雀の歌を聽きながら、野に耕してゐる農夫の顏は、神の子の　うに柔和であるべき筈と思ふ。たとへ日に曝され、雨に打たれて、皮膚の色は澁紙のやうにならうとも、平和の光は農夫の全身を掩ふて、自由の神の銅像のやうに、黑いながらも、淸く尊いところが、彼等の形相に現はれねばならぬのである。

（三）

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

あゝ農夫もまた戰の人である、彼等は人生の戰の最も激烈なる戰を戰ひつゝあるのである。自ら耕して、自ら喰うたのは、千年も前の農夫のことである。今の農夫は自ら耕して人に喰はれつゝあるのである。自分の作つた上等の精米は米の生る木を知らぬ都の人に喰はれ、自分は麥や、大根や、芋やを喰つて、藁葺きの薄暗い家に住んで、穴居時代と相距ること甚だ遠からざる生活をして居るのである。

（四）

農夫の作つた米は、醸されて酒になる。其の酒も上等のものは決して農夫の口には入らない。農夫の作つた米が地主の手に渡り、地主はこれを他の資本家に賣つて、酒と云ふものが醸されるのであるが、正宗となつた曉には、始めは殆んど無比であつた米も、固體が液體と變じたばかりで、最初の所有主は最早これに近づくことも出來ぬ。農夫の生んで育てた娘が、殿樣の鷹狩に出た時にお目にとまつて、妾に取り上げられたことは能く昔しの物語にあるが、斯う云ふ時には、其の娘の父が相應のお取り立てになつたものだ。しかし自分の作つた米、撒いて、植えて、草を取つて虫を逐ふて、苅つて、扱いで、叩いて、摺つて、篩つて、漸く俵に納めて、僅かの手數料を貰つて、地主に捧げた米が、正宗となつて玻璃の瓶に入つた時には、モウ農夫はこれに近づくことも出來ない。玻璃の小瓶は、『私はお前たちのやうな賤しいものに飲ませるものでは無いよ、お前には白馬で澤山だ』と云つたやうな顏をして銘酒屋の棚の上に立つて居る。こんな怪しい、何處の馬の骨か濁り水かわからぬ名ばかりの正宗でも斯うだもの、生一本の菊正宗と云ふやうなものになつては、農夫は全く其の姿さへ見たことは無いのである。苗が米になるまでの粒々辛苦は、兎ても米が酒になるまでの手數の比ではあるまいに。

（五）

米が米相場とか云ふものに用ゐられると、幾百千圓の金が羽根を生やして飛び歩くとか聞いてるが、粒々辛苦で米を作り上げた農夫は、そんな事を知らずに、また來年の米を作る支度に、汗まみれになつて、稲の株を堀り返へして居る。斯くして農夫は春、夏、秋、冬を希望無く空漠の生活に暮して、何人の意識無しに徒に筋肉の惡戰を續けて、譯もなく都の人を呪つて居るのである。さうして農夫の人相はますく\險惡になるのである。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

婦人解放の第一步

深尾韶

「婦人解放」の聲は、日本に於ても、既に可なり久しくなつた。其の言議者と運動者とは、獨り男子間から出たばかりで無く、實に、女子自からも熱心な代表者を出して居る。

けれども、多數の婦人はやつぱり變る事の無い立派な奴隷だ。父に依り、兄に依り、良人に依つて衣食を得るの外、他念なく、小やかな虛榮に滿足して、その全身を臺所と針箱と襁褓との勞働に費つて了ふ。謂はゆる「良妻賢母」とは、此の臺所、針箱、襁褓の奴隷を嘆美した名である。實に結婚後の婦人ほど、よく婦人奴隷の範を示してゐるものはあるまい。

ゆゑに、進步せる獨立婦人は、往々にして結婚を拒絕せんとする氣色を示す。結婚の拒絕、そは人倫に背いてゐる事いふまでもないのであるが、一旦結婚したが最後、其婦人が如何に進步してあらうとも、如何に

獨立の氣象に富んでゐやうとも、良人の世話と舅姑の用は辨せねばならず、そうこうしてゐる內に子供でも產まれゝば、本も讀まれず、交際も出來ず、見聞は次第に減り、獨立心は妨げられて、兎ても角ても奴隷の境界に落ち行かねばならぬ運命を有つてゐるのだ。これを思へば、彼のうら若き乙女が、胸に溢るゝ憂へを擁いて、結婚を拒絕せんとする心根、あはれとも哀れ至極では無いか。然も、キユピツトの一矢に、もろくも其が城を射落されて、樂しき果敢なき夢の幾月、やがて覺むれば、はや身は長久に免れ得ぬ奴隷の境に捕はれし悼ましの淚。その淚の晴るゝ頃は、此處にも又一個、よい奴隷が出來上つて、「結句この方が氣樂で」などゝいふ。

「無智」は奴隷婦人の全部である。かゝる婦人に對して、其の不自由な境遇に同情し、解放せられねばならぬ由を話すと、その人は淚を零す。嬉しくつてゞあらうけれど、其の嬉しさは、人が自分にチヤホヤ言つてくれる嬉しさであらう。あなたも女であるからは、餘

所事と思はずに、些とは運動でもしたら、と云ふと、默つて了ふ。自分たちの事を男まかせにしておく意氣地なさを責めると、泣く。慚ぢて泣くのなら賴もしいが、これは叱られたのが口惜しくて泣くのだ。おまけの果には、大きなお世話と怒つて了ふ。如何に『婦人解放』『婦人解放』と、男ばかり騷いでも、肝腎の女が此の有樣では手のつけ樣が無い。

氣短かな男子は、之を見て直ぐ、女は濟度の出來ぬもの、女は解放すべきものでない、と極めて了ふ。併し能く考へて見ると、醉つてる人に飲酒の害を說いても何にもならぬ筈である。醉つてる人は、是非の辨別を失つてゐる。辨別を失つてるから飲む。飲むから尙ほ辨別を失ふ。婦人は奴隷であるから人らしい心が無い。人らしい心がないから解放運動も出來ぬ。解放運動が出來ぬから尙々奴隷の境遇に沈む。予も曩には婦人の意氣地なきを怒る一人であつたが、今日では、その怒りは憐れみと變じてゐる。否、慚愧と變じてゐる。婦人に自由を與へず、解放運動を起す事すら爲し得な

くしてゐるのは、吾々男子では無いか。人心地なき婦人をいつまでも、いつまでも、其の半死のまゝにして置いて、どうして婦人の人心地なきを罵る事が出來るものか。

當然の道行を以てすれば、吾々男子は、先づ婦人解放の實行に着手して、徐々として婦人の生氣づくを待つべきである。婦人一人覺むれば、其の一人と共に婦人解放を唱へ且つ實行すべく、婦人五人覺むれば、其の五人と共に叫び且つ行ふべしである。さもなくて、徒らに聲ばかり大にしたればとて、決して解放は出來るものでない。百年河淸を俟つの愚と等しい。

然らば男子は直ちに、婦人解放に着手せねばならぬ。而して予の見る所を以てすれば、臺所といふ重き厄介物を、婦人の手より取去るのが、其の第一着手であると思ふ。

それには、少し慘酷かも知れぬか、成るたけ下女下男を雇ひ入れて、臺所を任せ、妻を其の煩累から救ふが善い。臺所の嫌な勞働も、專門の職務として生活の

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

費を持來すなどは、下女下男たるものまだしも我慢がし易いだらう。若し下女下男を雇ひ入れる事の出來ぬものは、良人たるもの宜しく進んで、臺所の仕事の幾部分、なし能ふべくば半分、を受持つがよい。そして妻が智識の目を開き得べき時間の餘地を與ふべきである。彼の數戸の臺所組合を作つて、飮食物を交代に調へるなどの方法も、空しく臺所に費消する奴隸的時間を節減するに於て、大に効があるであらう。

予は今よりして、如何にせば最も多く婦人を進歩せしめ得るかを考へて見たいと思ふ。

前號目次

▲十分の春色（堺利彦）▲婦人問題雜俎（堺利彦）▲芝公園の逍遙（上司小劍）▲非墳墓論（上）（若宮卯之助）▲謂はゆる人畜生（深尾韶）▲ジヤが芋料理（山田嘉吉）▲米國婦人運動小史（大杉榮）▲女學校の倫理に就いて（中尾淸太郎）▲春雨の街（德永狂風）▲羅馬の家庭（しらぬ火）▲孤獨（木）▲女學校評論（六）御茶之水高等女學校（目黑里人）▲ローマ字欄（深尾韶）

落髮

德永狂風

海綿はからびぬ、やがて絕えやせむ、得たるすてたるかゝる一時
わがこゝろ熱し、暫しはみ胸より放たせたまへ歌をうたはむ
七面の裏おもてあり一面はわれに向へりいと冷やかに
惡人かしらず、ふたゝび君をみし時は、まされる美くしさにて
まろきこと玉によく似るあつき頬をゆふべの風に吹かせつゝ來し
なきがらの姿をおもひ、あさましくよき後世ねがふ信ふるき人
つめたき語たまく口にたはぶれぬ焔の如きあつさになれ來
熱さとや溫かさなし、ひやゝかさ石とあざめばやゝ心足る
もらひ泣きす哀しき人の詩の主に似るおほくして我かたわらに
なほかくて恥負ふ、何の科なれば石にれたまふ衰へ人よ
灯のあかき小さき窓は語すくなく春雨ふるや金の色して
あさましき日々を送ると人のいひ衰へそめぬのち添ひ人は
うつくしき花のえまひのくれなゐに妖ひそむらし黑髮かゝる
ゆふ風のはげしき旋をまくほとり落髮まふや狂ほしとみぬ
爪は似る八重の櫻のはなびらに、血しほののぼり紅ゐすれば
めざましき菖蒲むらさき流るゝに似たるが中のま白なる足
紅ゐのいと美くしきおん濶き眼にみもたえず燃ゆるに似たる
夜商人あまた店しぬうつくしき灯みゆれ川をへだてゝ

トマトー料理（上）

山田嘉吉

（一）スチウドトマトー Stewed tomatoes

（一）煮湯をかけて皮をむく。
（二）別に葱をバターで柔かに煮て、
（三）其處へトマトーを四ツに切つて入れる。
（四）之れを三十分間ストーヴの上に置く。
（五）之れに胡椒鹽を入れ、
（六）玉蜀黍粉一匙を少しの水にといて入れてかきまはす。

（二）スケラップトトマトー Scalloped tomatoes

（一）トマトーを薄く輪切にし、
（二）燒盤の中に麵麭粉をしき、トマトーを乘せ、又麵麭粉をしき、トマトーをのせ。
（三）最も上に麵麭をふりかけ、爐に入れ、
（四）十五分より二十分位やく。

（三）スタフドトマトー Stuffedtomatoes

（一）トマトーの上部をそいで、穴をあけて、中實をゑぐり出し、
（二）中實ペスチウドトマトーをつくり、汁を煮つめて堅くして、
（三）之れに麵麭粉をませて、
（四）鷄肉を刻して入れ芹をませ、もとの穴へつめる。

（四）ローストトマトー Roast tomatoes

（一）湯で皮をこき、上を少しそぐ。
（二）中實をとり出し、バタと胡椒と鹽とをつぎこむ。
（三）上にバタをかけて、爐でやく。
（四）こはれやすいから弱い火で長くやく。

（五）ブロイルドトマトー Broiled tomatoes

（一）トマトーを四ツ切にし、
（二）盤の中で、皮を下に、實の方を上へに向けてならべ、
（三）バタを少し入れ、鹽をふりかけ、
（四）强ひ火でやく。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

雲と子供

しらぬ火

坊やが雲にいひました、
「明日まで待つてゝ頂戴な、
雲ちやんそしてもろともに、
樂しい旅に立ちませうー。

お前は輝く日の下を、
僕は花咲く野の中を、
父さんの御馬に跨つて、
早く行きたい、行きたいなー。

御覧よ、僕はこの通り、
一人で御馬に乘つてるよ、
まして父さんと一處なら、
僕はちつとも怖かない。

天氣がいゝと父さんは、
僕をガイドになさるのよ、
お前も御空で見えるでしよ、
たづなさばきのうまいことー。

あゝ！今、たつた一飛に、
お前のとこへ行きたいな、
日は暮れ、暗は蔽ふとも、
（雲ちやん、來たよー）といひたいな。

明日を待つ間のよすがらは、
蝶の夢より美しい、
夢にお前と遇ひませう、
雲ちやん、いゝ子よ、待つといでー。」

星の瞳に、輝けろ、
熱い望を告げますと、
憎くや風めが吹いて來て、
雲はむかふへ飛んで行く。

けれど坊やはうれしさう、
木のきらめき、鳥の聲、
こだまが胸にさゝやくは、
（あした！、あした！ 樂しいなあ！）。

可愛や、パッチリ開いて、
御空仰いだ双の眼に、
あつい、名殘のキスをして、
夕陽も沈んで行きました。

それではおうちへかへらうと、
蜉蝣のやうな旅人に、
別れ告げ樣と思つたら、
あら！、美しい雲ちやんの。

黃金まばゆい面影が、
まあ、灰色のたゞの霧、
坊やがビックリした聲で、
其姿さへ消えました。

新刊紹介

▲**西鶴全集** 西鶴は江戸文學の粹であると共に、日本文學の精華である。其全集が始終發賣禁止の厄に遭つて、世に公にせられないのは、實に慨かはしい事である。其好色本の如きは絕世の好文字たるに拘はらず、其當時に於てすら、版木を沒收せられたといふのは、たとひ、男女間の關係を忌憚なく畫いたにもせよ、これを藝術の上から考へると遺憾千萬な事である。これを今度公然と世に出した平民書房の功勞は誠に大なるものである。上下二卷には、好色物を除く外、大概網羅してある。編輯の體次、校訂、校字、製本、等は普通と見てよい。(發行所本鄉區弓町平民書房、定價上下二卷各三圓五十錢)

▲**西鶴好色本** これは右全集の、補遺として西鶴の好色物を集めたものだ。西鶴の文は殊に其好色物に於て、特色を發揮してる、風敎に害のある處は皆除去して、校訂を嚴密にしたにも拘はらず、當局者がこれが發賣を禁止したのは譯の解らない話だ。なほ右の全集以外に大分西鶴の作があるから、追つて、それ等を續篇として集めて出すそうだ。(發行所同前、定價一冊一圓八十錢)

▲**海外より見たる社會問題**（金子喜一著） これは米國社會黨新聞の記者たる、金子君が遠大なる識見を以て、紛糾せる現時の社會問題を、縱橫に論究したものである。實に興味ある好書である。(發行所同前、定價一冊四十錢)

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

電柱の貼り札

木

自分は例の朝寢坊から、やうやく六時が二十分ばかりも廻つた頃に目を覺ましたのだが、もう表は雨上りの朝空が殊更に能く晴れて、一枚開けてある人見からは、朝日が眩しい程に明るく差し込んで居たので、驚いてはね起きた。

何しろ開店時刻のバロメートルなど、有り難い別名を賜はつて居る自分のことだから、起きると直ぐに店が開く。いつも間に合はないことに定まつて居るので、他の者が朝飯をやつて居る間は顏も洗はずに賣場に座つて、新聞を見るのが例になつて居る。

雨上りで埃も立たず風も無くて至極心持ちの能い朝であつたから、うつとり表の方を眺めて居ると、ふと向角の電柱に新らしい貼り札を見出した。

幾年かを雨風に曝れた電柱に、白紙の新らしいのを貼つたのだから、はつきりと一きわ目につく。丸で貼札それ自身が何か人探しでもするやうに四ツ辻に立つて、通る者を一人も洩らすまじと睨んで居るかのやうに見へて居る。

自分は物珍らしさと、それにまだ起きたてゞ頭もはツきりしないところであつたから、他に氣を止めて見るものもなかつたので、たゞ何となくそれに見入つて居るのであつた。

紙は西の内一枚程の大さで、右の方へ外交員募集と筆太に書いてあつて、それに大な赤いけん點が打つてある左の方には月收二十五圓と目に付くやうに記してあつて、その下に何やら細かに委細書がしてある。何と云ふ家で、何の營業なのか、その邊は少し間が隔つて居るので殘念ながら眼鏡の力でも借りなくては見る事が出來ない。

暫時すると北の方から女學生風の女が一人、郵便局へでも通ふのであらう、毎朝見る顏で色白の十七八、何處と云つて取り立てゝ云ふ程の事もない十人並の當世顏が、瓦斯御召の矢がすりの袂に、時色めんりんす

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

のふりを見せて少し反り身にスマシ込んでやつて來たが、ふとこの貼り札へ目をつけて立ち止つた。

外交員といふのに女が見ても仕方があるまいとは思つたが然し當節柄だ、婦人の外交員なども大に能いかも知れぬ。現にこの間なども何處やらの保險會社の勸誘員と云ふのが年の頃廿七八、黃八丈の被布に紫紺の袴をはいて澤山もない髮の毛を大ハイカラに花色のリボンなんどをさしながらやつて來たが、能辯滔々、鶯の連續でヒドク困らされた事を覺へて居るから、なる程、これも時世の潮流だなと早速に合點はしたけれど然しまだ何んと云つても肩揚げのあるお年頃だ、外交員志願にはちいと早過ぎるやうだが、さてどうなることかと心配しながら見て居ると、貼り札には二十五才以上四十才以下の男子とでも書いてあつたのであらふか聊か失望の氣味で通り過ぎる。

それから一二時間は、自分にも用が出來る、お客樣はお見へになる、電車は通る、氣に止めて見ることも出來なかつたが、やがて午前十時頃ふと氣が付いて見ると、今度は十八歲の青年、苦學生とでも云ふのであらふ。蓬頭垢面、靑く長い顏をした男が薩摩下駄に白小倉の鼻緒、それももう鼠色になつたのを履いて、色の褪めた紺がすりの袷に、衿の折れた袖の長い、綿子ルのシャツを着たのが、書物の包らしいのを小脇に抱へて、例の貼り札の前に立つて居た。

暫く立ち止まつて讀んで居たが、やがて又歩き出した。一二間行くとちよつと又振り返つて見直した。頭を少し前へ下げて、何をか考へながら、それでも急ぎ足にさつさと歩いて行く。

正午頃から風が少し吹き出した。空がだん〳〵に曇つて、その内に雨がシト〳〵とやつて來る。人通りが大分少くなつた。

その間も注意して居ると幾人も幾人も立ち止つては讀んで行く。こんなもの！、といふやうな顏をするのもあれば、又少なからず熱心に讀んで行くものもある。

貼り札はその内にだん〳〵雨がかゝつたので、上の方が風にあほられて少し剝れかゝつて來た。風の吹く

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

度に剝れた角がブル／＼と動いて少しづゝ餘計に剝れて來る。丁度三分通り計り剝れかゝつた時であつた、向横町の方から郵便の集配人が桐油の合羽を着て鞄を片手に角のポストへ向つてやつて來たが、ちよつと顔をあげた拍子にこの札が目についた。

立ち止まつてちよいゝと見上げたが、又氣がついたと見へてあはてゝポストの方へ行つた。郵便物を出して鞄へ入れて札をさし換へて錠をピンと下ろすと、今度は大通りを斜かけて南の方へ電車線路を横斷らうとして歩るき出したが、十足ばかり歩くとふと立ち止つてさうして何か思ひ付いた用でツカ／＼と前の電柱の傍へ立ち戻つた。懷中をかき探つて一冊の古びた手帳を出した。風のあほるのを待つては、のぞき込むやうに見上げて大急ぎで書き取つて居る。

氣を付けて見ると、それは毎日能く見る集配人で年ももう四十才に近い男である。家には妻も子もあるのであらふが、この年で郵使集配では中々家計に骨が折れるであらふ。大分永く勤めて居る處を見ると、可成

に人の能い柔順しい男だとは見へるが、それでもだん／＼子供でも多くなるといくらか先の事も考へる、考へればその度に自分の年を思ひ出して必ず氣が氣で無いのであろふ。だから甘く行くか行かないかは分らないが、兎に角考へた上でこの募集に應じて見やうとでもいふのであるらしい。

寫し終ると大急ぎて合羽の頭巾を直して、郵便集配特有といふ例の面白い足どりで小走りに馳けて行た。

風は次第に強くなる、雨はだん／＼餘計に降る。貼り札はジツクリにぬれていよ／＼危くなつて來た。紙はひとりで氣を揉んで居る。如何にもしてこの電柱を離れたくないと云ふ風に幾度か幾度か吹かれるのを、其度にばた／＼と悲しい細い叫び聲を揚げては、血汐のしづくを四方に垂らして、しきりに風雨と戰つて居る。往來の人が見へる毎にことさらに悲しい叫び聲を立てるのであつたが、誰れひとり返り見て與れるものも無かつた。紙はもう最後の悲鳴を揚げて居る。

忽ち一陣の強い風がゴーツとばかり吹いて來た。貼

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

り札はついにおへなくい吹き飛ばされた貼り札は夕暮れの暗路に落ちて、しばらくは白く見へて居たのであつたが見る〳〵往來の人に踏まれて、泥土の中に其影を沒してしまつた。

夜はだん〳〵更けて來た。苦學生や郵便夫や其他の人々は今頃寐床の上に倒れて、どんな考へに苦しめられ居るのであらうふか。

あゝ職業を爭ひ求めて野獸の戰へる社會も、今はしばらく闇の底に眠つて居るのである。

新刊紹介

▲平民主義（幸德秋水著）　著者が舊週刊平民新聞時代よりの作物を網羅して一册としたものである。これ皆當時の世を振動せしめたものである。論說あり、批評あり、短文あり、漢詩あり、辛剌なる筆鋒は能く著者の面目を躍如たらしめてゐる。惜い哉、頑迷なる當局者の爲めに、發賣禁止の厄を蒙つた。秋水の名が、いかに政府の恐怖する處となつてゐるかゞわかる。（發行所、京橋區隆文館、定價一册五拾錢）

▲菜食主義博覧會

英國マンチエスターに於る菜食主義協會は、去る千八百四十七年の創立に係り、目下は英米獨佛墺其他各國に各數十の支部を有し居るが、本年は創立六十年に該當するを以て、八月マンチエスターに於て菜食主義の博覽會を開催するよしにて、嘗て白耳義萬國博覽會事務官として出張せる農商務技師吉岡哲太郎氏を經て、日本政府にも其の出品勸誘方を依賴し來れりと云ふ。尙ほ同博覽會は、第一に日本の大豆製の醬油を始めとし、米麥等其他同主義に關係ある總ての物品に就ての出品を歡迎するよし也。

▲下女下男の給料調べ

或る筋にて全國各地の下女下男の給料を取調べたるに、普通平均の給料額左の如しと云ふ。

	下男	下女		下男	下女
長崎	四、〇〇円	二、〇〇円	宇都宮	二、五〇円	一、五〇円
熊本	五、〇〇	二、〇〇	高崎	三、〇〇	一、八〇
德島	四、一七	一、五〇	長野	二、五〇	一、二五
高知	四、〇〇	二、〇〇	名古屋	一、五〇	二、〇〇
京都	四、〇〇	三、〇〇	富山	五、〇〇	二、〇〇
大阪	四、五〇	二、七〇	金澤	五、〇〇	三、〇〇
神戶	二、五〇	二、〇〇	新潟	二、〇〇	一、〇〇
廣島	二、五〇	一、八〇	仙臺	二、五〇	一、五〇
下ノ關	二、五〇	二、〇〇	秋田	四、〇〇	一、五〇
松江	一、五二	一、三三	靑森	二、五〇	一、二〇
東京	二、五〇	二、五〇	函館	三、〇〇	一、五〇
橫濱	二、〇〇	一、五〇	小樽	四、〇〇	二、五〇
水戶	三、〇〇	一、五〇			

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

何故に結婚する乎

中尾清太郎

『何故に結婚する乎』。むづかしい問題である。之が解ければ、人生問題の一面も解けたといふものである。但し此問題の起こる前に、人は結婚すべきものなる乎、結婚は善い事なりや、等の問題があらう。是等は後に續く研究の妨にならぬやうに、順序として初に片附けて行くが便利である。

既に性に男女の別がある。何故の別か。これは結婚すべき、若しくは結婚してもよき關係を示したものではあるまいか。

然らば結婚は善い事か。普通の塲合に於いては結婚は善い事である。併しながら時として（若しくは人によりて）惡い事もある。言ひ換へれば惡い事になることもある。即ち其目的を誤りたる時の如き。

爰に謂ふ『何故に結婚する乎』は、勿論普通の塲合に於ける研究で、敢て例の少い特別の塲合に就いて之を言ふのでは無い。即ち人は結婚してよきもの、結婚はよい事として、といふが前提で、さて『何故に結婚する乎』と續いて起こる問題である。若し「善い事であるから結婚する」といふだけならば、それは「結婚したいから結婚する」といふと同じく、此は本能的、彼は道德的の差違はあるも、其考へ方が餘りに單純で、こゝで求むる解答になつてゐない。寧ろ人生の高尚なる意義と其價値とを粗略に觀たる言ひ放ちと謂ふべきであらう。

余は今少し漆膠く、わが讀者諸子と共に此問題に心を潛めてみたい。

尚ほ吾等の思想を組織する前に、一條の統計に關する物語を剩す。――佛國で或統計家が十五歳より十七歳までの少女九十五人に就いて、女は何の爲に結婚する乎を尋ねたところ、

五人は、父母の保護を離れて獨立せむ爲、
十人は、愉快なる生活を送らむ爲、
五人は、自由に旅行せむ爲、

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

七人は、自己の家庭を有せむ爲、
四人は、家族を有せむ爲、
三人は、結婚を全然望ましからぬ事なりと答へ、
六十一人は、結婚を望むも其何の爲なるかを説明す
　能はずと答へたと云ふ。

これは餘程面白い話である。研究するも、味ふも、又單に閑流しにするにしても、面白い話である。中にも九十五人の中の六十一人といふ最大多數が、結婚を望むも其何の爲なるかを説明する能はずと答へたのは、至ッて無邪氣で、眞摯で、愛すべきである。これは寧ろ結婚したいから結婚するといふ方で、人性の内面を僞らず白狀した本能の聲である。實にこれが少女の眞情であッて、國の東西、恐らくは時の古今、すべて變はる所なしであらう。然も余は遂に本能の聲だけで滿足することは出來ぬ。斯かる塲合に吾々は、本能の聲と共に良心自覺の聲を聽きたい。喚び醒まされたる道德の聲を聽きたい。余が佛國の少女を賞めたのは、其結婚を望むと云ふ虛飾なき言ひ顯しを喜んだので、其

何の爲なるかを説明する能はずと云ふ自覺なき言を嘉しとしたのでは無い。

其他、三人のもの、四人のもの、七人のもの等の答が、ひとつ〳〵明かに説き分くべき理由動機を其根底に蟠らしてゐるらしく、且つそれが見え透いて大概誤らぬ推定を下されさうであるから、一層面白い。

されども、吾等は最早吾等の結婚觀を語り出したが好いと思へば、今それを論ふことはせぬ。吾等は佛國の少女と幾分か同じき思想を有つ。

A　愉快なる生活を送らむが爲に、
B　自己の家庭を有せむが爲に、
C　家族を有せむが爲に。
D　本能の滿足を得むが爲に——結婚したきが故に、
E　人生を幸福にせむが爲に、
F　相愛せむが爲に、
G　人格相補はむが爲に、
H　向上發展せむが爲に、

と斯う列べて答へてみたい。

結婚の目的は、爾く單純なるもので無い。いろ〳〵

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

の内容を具へてゐる。或人には、まだ以上の數目的では不足であるも知れぬ。又時代に從つて、更に遷り行くも知れぬ。余は今匆卒の際に、これだけ搾り出してみたのみのことである。然も所詮は、

一　生活其者を樂しまむが爲、(ABCは之に屬す)

二　本能を滿足せしめむが爲、(Dは之に屬す)

三　相愛の情を滿足せしめむが爲(EFは之に屬す)

四　互に向上せむが爲、(GHは之に屬す)

の四つに歸するであらう。四ッの中、何人が孰れを撰むとも、何人が孰れに適ふとも、皆各人の性格學問に依つて異なり、各人の年齡境遇に依つて異なるがゆゑに、必ずしもそれが人生に於ける價値を軒輊することは困難である。けれども究竟が人類相愛の情を滿足せむが爲に、先づ男女結合するは、至當にして敢て爲すべき天理であるを信ずるに至つて、誤謬は無い。但し余が所謂相愛の情とは、宗教的用語を籍りて言へば、神の心を指したもので、其意義廣く、高く、且つ深きものがある。人々此點より出發して、本能の滿足を喜び、生活自然の味を樂み、更に人格相補うて向上せむと心懸くるもの、其趣く所に任して、危險と卑吝とは生ずまいではないか。(五月十七日稿)

妹の墓

張　翁

寒村君の「乙女の死」を讀んだら急に亡き妹の身が懷しくなつたので、自分もこんな回想記みたやうなものを書いて見る氣になつた。

　義妹の名は靜といふて小學校からの親しい友であつたが、別段お互の家が近いといふのでもなかつたけれど、二人の境遇や年齡やがよく似てゐたものだから、自然と相親しくなつたものと見える、

　自分が母に別れたのは十一歲の時であつたが、其の時はもう靜さんにはお母アさんが亡かつたのだ。

　噫人生の春若うして慈愛深い母上を失ふた私達二人は、どんなに悲しい寂しい思ひをしたでせう。恰度私の母が亡くなつた翌日の夕方に、靜さんが遊びに來てくれたので、私達二人は悲しい沈み勝な事を言ひ合ひながら、櫻の花の散り布いた庭の樹立の下で泣きあつた事なども、今アリ／＼と思ひ浮べる。又其の時の靜

さんのませた様子をして、寧ろ姉さんでゝもあるかのやうに私を慰めてくれた楽しい面影は、恐らく死に至るまで自分の記臆を去らぬであらう。

此のやうにして二人の間は悲しい時には共に泣き、楽しい時には共に笑つて、四五年の月日はまるで夢のやうに過ぎ去つて了つたが、自分が故郷の中學校へ入學した時は、靜さんも小學校を卒業したので矢張り女學校へ通ふ事になつた。

然るに其の年も半は過ぎて、野に悲しい聲が聞えるといふ九月の暮れ、靜さんの一家は都合あつて山形へ移る事になつたので、私達少年時代からの無二の親友は遂に悲しき別れをせねばならぬ事となつた。

別れの夜の悲しき思出は、今猶自分の悲哀史の一部分をなしてゐると信ずる。噫、彼の夜の月よ、星よ、秋風に悲しく戰ける枝垂柳よ、そして川岸からかすかに響き來る笛の音さながら、私の胸にもたれて泣きに泣いた靜さんよ。思ひ出して下さい。私は之れを思ふ度に今も猶胸の狂はしさを覺えるのだ。

其の後靜さんは山形の女學校を卒業して、一昨年の春上京して、本郷の女子美術學校に入學して、豫ての志望の洋畫を習ふ事となつた。其の間の四五年といふものは靜さんは少なくとも毎土曜日毎に手紙を送つてくれ、私も亦事情の許す限り熱心な手紙を送つてゐたが、いつの間にか靜さんは自分を呼んで兄といひ、自分も亦、生れた年の月日からすれば寧ろ弟であるにも係らず、兄を以て任ずるやうになつたのである。

然るに其の年の秋頃、靜さんはある大學生（哲學科の學生で今年卒業する筈）から結婚を申込まれて、大變苦しんでゐるとの事であつたが、又ある陸軍の大尉（士官學校の教官）からも同じやうな事があつたとかで、随分苦しい悲しい事情を私に訴へて來たが、是の時はもう恐る可き肺を病んで、漸くに衰い初めてゐたとの事であつた。

噫、自分はもう幸薄い靜さんの身について多く語るに忍びない。靜さんは何故大學生の戀を排けたのであらう。何故切なる大尉の愛を拒んだのであらう。今や亡き人となつた靜さんの胸中の秘密は、誰れ知る人もないけれども、自分は自分の胸の奥の奥に、微かに、されど決して消え失する事なき、ある止み難き情感を覺えるのである。そしてせめても靜さんの最後の枕邊に侍して、靜かに消え行く其の瞳のうちに、一點の光りを與へし事を神に感謝する。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

喜劇
貧民長家

堺利彦譯述

是は英國の作劇大家バーナード、ショウの名作『ウイドワース、ハウゼス』の筋書である。ショウ氏は作劇家として有名なるのみならず、又社會主義者として有名なる人で、此作の如き、多數人民の膏血に衣食する上流社會に對し、痛酷にして且つ巧妙なる譏刺を加へたる所、其の技倆の卓拔と共に其の主義主張を見るに足る。猶ほ此作は目下歐米の劇場にて盛んに興行せられて居る。

▲初　幕

時は千八百八十何年の八月、或天氣の好き日の午後、處は佛國ライン河の邊なるレマーゲン市の或ホテルの裏庭。

英國人の旅客二人ホテルより出で來る。一人はドクトル寺内春太郎、年は廿四歲、まだ書生風の、一向氣取らぬ、無邪氣な、元氣な青年紳士。今一人は古賀忠

平、年は四十以上、五十近い、營養の惡そうな、髮の薄い、妙に氣取つた、少し滑稽な紳士。

二人は芝原の椅子に腰かけて、ビールを飲みながら色々物語る。寺内は卷煙草なんど吹かしながら、小歌を歌ひ〳〵面白がつて居る。古賀は寺内が餘りに無作法だと云つて、頻りにたしなめて居る。

古賀『寺内君、君も紳士なら、チト紳士らしく仕て貰ひたいものだ子。それだから英國人が大陸で嫌はれるのだ。マア此の我々の姿を見たまへ。

寺内『我々の姿、何處が惡い？、

古賀『何處がッて、無作法だよ君、無作法だよ。それもマア船中丈なら可いが、ホテルに來ちやア皆それ〳〵キチンとするからね。それに君は何うだい、其ジヤケツ一枚ぢやないか。君の身分を人が知りや仕まいし……、

寺内『何うでも可いぢやないか、そんな事。それよりかねえ古賀忠君。

古賀『オツト待つたり、人前で古賀忠は眞平御免だ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

僕は船中でも冷々したよ。あのソラ娘を連れた立派な紳士ね、

寺内『ウムあの人達は何うしたらう?』

古賀『矢ッ張此處に來て居るよ。

寺内『ナニ此處に?、ほんとか?、僕ア着換を持つて來るんだツけなア。オヤ來た〳〵、そこに來たよ。

五十ばかりの丈高き紳士と若き美しき娘と芝原に出で來る。紳士はサモ成功的の、氣力に充ちた、嚴めしげな人物である。娘は肉附のよい、美しい、活潑な、元氣な、貴婦人らしくもあるがさりとて嫋々した所は少しもない、シツカリした婦人である。

其二人は茶を給仕に言付けて、直ぐに寺内等の隣のテーブルに座を占めた。

古賀は何と思つたか『時に寺内君、あの黒澤男爵夫人は君のお母さんの兄弟か、お父さんの兄弟か、どちらだね』と聞えよがしに話しかけた。隣席の紳士は果してチヨツト此方を振向いた。

寺内『母の方さ勿論、何うして今頃そんな事聞んだ。

古賀『ナニ只だチヨツト思ひだしたからさ。伯母さんは乾度早く君に結婚させたいのだらう。お醫者さんには早く奥さんが無いと不可よ。

古賀はこんな話をして居る中、ツイ隣席の親子にも話しかけて、同國人だと云ふので殊に早く懇意になつた。紳士の名は平沼、娘の名は房子。平沼は黒澤男爵夫人をも知つて居るとの事。

それより四人で茶を飲みながら色々と話の中、直ぐ此の先の方の何とか寺といふのを見物に行く事になつた。平沼と古賀とが先に立つて裏木戸から出て行つた。房子は跡に従いて行かうともせず、ジッと立つて二人の後姿を見やつた後、ニコリと笑うて寺内の前に坐り直した。寺内も妙にニヤリとして顔を見合はせた。實は兩人は既に船中に於て内々言葉を交して居たのである。

房子『あの時寺内さん、あなたまだ知らない方でしたわねえ。誰の紹介もないし……』

寺内『でもあなたが先にお話しかけなすつたぢやあ

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

りませんか。私それが非常に嬉しかつたですけれど……、

房子『アヲあんなこと、私只だ向ふに見えたお城の名を聞いたばかりぢやありませんか。何も少つとも惡い事ないわ。

寺内『勿論何も惡い事はありませんさ。それに、今はチヤアンと斯うして御知合になつたんですもの。

房子『ほんとに好い都合でしたわねえ。

寺内『然しモウ參りませうか、お父樣がお待ちでせう。

房子『あなた行らつしやりたいんですか。（少々不平の面持）。

寺内『あなたお厭ですか。

房子『厭ですわ。（プリヽとして横を向く。）

寺内（ビツクリして）『あなた御怒りなすつたんですか。エ房子さん。私は又、あなたをお引止する樣では惡いと思つたもんですから、それでツイ……、

房子（機嫌を直して）『だつてあなた跡にお殘りなすつて、何か私にお話しなさるお積だつたんでせう。

寺内『ハイ、いえ何に別に、何れ又……、

房子『何れ又つて、何時又お目に掛るか知れないぢやありませんか。（急にこゝで調子を強めて）寺内さん、お話があるなら今云つて聞かせて下さいましな。

寺内『ハイ、實は其の、私そう思つたんです、其の……私が若し……（こゝで行きつまつて跡はモウ云へなくなつた。）

房子『あなた何うお思ひなすつたんですの、それ云つて下さいましな。

寺内『實は其の……房子さん……私あの………（又跡が出なくなつた。房子も少し躊躇したが、とう〳〵此方から進んで寺内の手を握つた。寺内は嬉しさに目も眩むばかり）房子さん、房子さん、私實に嬉しいです。私あなたに斯うして戴かなきや迚も私から云ひだせや仕なかつたんですよ。

房子（まだ少し不足と見えて）『だつて寺内さん、あなたまだ何んにも仰しやらないぢやありませんか。

寺内『モウ此上云ふ事ないんですもの。（房子の唇に

二度三度接吻した。）
此時忽ち晩の食事の二十分前の鈴が鳴りわたる。同時に平沼と古賀とも裏木戸から歸つて來る。
平沼（少し六かしい顏色で娘に向ひ）『一緒に行かうと思つて居たのに。
房子『私今行かうと思つてたのですわ。
平沼は別に何とも云はず、食卓に着く用意にとて房子を連れて内に入つた。跡で古賀は寺内をつかまへて散々にたしなめる。
古賀『いけない、いけない、君は何うもイケナイよ、僕は實に赤面してしまつた。平沼氏は君紳士だよ。其の紳士の娘を君今何うしたんだ。
寺内『ナニ何うも仕やしない。
古賀『何うも仕ない事があるもんか、今現に接吻して居たぢやないか。
寺内『そんな事が遠くから見えるもんか。
古賀『見えたばかりぢやない、音まで聞えたよ。
是には寺内も大きに閉口して居ると、平沼が再びそ

こに現はれた。
平沼『寺内さん、先刻あなたは私の娘とお話があつた樣ですが……、
寺内（强いて平氣な裝うて）『ハイ暫く色んなことをお話し仕ました。時にあの寺は如何で　た、隨分善い處でしたか。（とごまかしかゝる。）
平沼『今チヨト娘から聞きましたが、私はあの子の父として、殊には親のない娘の父として、早速伺つて置かなければならないと思ひまして……實は娘がお言葉の次第を眞面目に取つて居る樣ですが……、
寺内『勿論　私　は……、
平沼『イヤまあチヨツトお待ちなさい。私も一度は若い時がありました。それで若しあなたが一時の御冗談であるならば……、
寺内『イヤ決して、私は飽くまで眞面目に房子さんと結婚を望むのです、何うか御承諾を願ひます。
是で大體話は纏まつたが、平沼の方では、寺内の親戚に異議のない事を確めて、其上で改めて約束を結び

たいから、早速それ〴〵手紙を出して、承諾の旨の返事を取つて呉れと云ふ要求を出した。寺内の方では、それはいと易い事で、自分は分家の事であるから餘計な財産もなし、それで醫者にもなつて居るのであるが、其代り親戚は少しも八釜しい世話など燒かぬと答へた。平沼は又、金の事なら自分の方で幾らでも受合ふが、其代り房子の扱ひに就ては返す〳〵宜しく頼むと云つた。

それから跡で寺内は早速古賀に手紙を書いて貰ふ。古賀は大呑込でそれを引受ける。所が、いざ書かうといふ事になつて見ると、平沼の身分職業がトント分らぬ。そんな事を態と聞くのも變だし、善い加減に書いて呉れと寺内は云ふ。善い加減に書くのは譯はないが、然し細君に金が附いて居るとすると、其金が何うして出來た金か、それを聞いて置く必要がありはしないか、平沼氏が大泥棒の上りでないとも限るまいなど〳〵古賀は云ふ。

そこに丁度又平沼が出て來て、古賀が云ひにくさう

に身分職業の事を尋ねると、平沼はそれに答へて、自己が頗る富裕の身の上なる事、然し其富は自分獨力で作りあげたる事、娘は悉く其富を相續すべき者なる事、及び其收入は倫敦に有する多くの不動産より來る者なる事、等を告げ、猶ほ黒澤男爵夫人が倫敦の大地主たる事、及び寺内氏も亦た可なりの地所を有する事は、平生から善く知つて居たと云ふ話をした。

それで其日の話は濟んで、春太郎と房子とはモウ話の極まつた者の樣に、サモ睦ましく手を取りあうて、四人打連れて食堂に入る。

▲二幕目

九月或日の朝、平沼氏の別莊の一間、平沼氏は娘房子と共に暑中を此に暮して居る。

平沼氏は今テーブルに對つて何やら書類の取調をして居る。そこに利光何某、鞄を提げて入り來る。利光は口髭頰髭などモジャ〳〵と生へて、一見薄汚い、貧相な男である。

利光（忝々しく一禮して、鞄の中より金財布を取出

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

し』「今朝は何うも餘り澤山御座いません。
平沼は何やら色々と小言を云ひながら家賃取立帳を調べて居たが『ナニ第十三番戸の修繕費五圓二十錢、是は何うしたのだ。
利光『それは三階の段梯子を少し修繕したのですが、彼處は餘り甚く壞れて、それに手擦はなし、隨分危險でもあり、八釜しく云はれたものですから、ツイそれだけ仕てやつて置きました。
すると平沼恐ろしく怒りだして『利光君、一體君は何と思つて居る。五圓だの十圓だのと年に幾度修繕費を出させる積りだ。何もあんな長家を別莊か何ぞの樣に扱ふにも及ぶまい。
と云ふので、迚もモウ此上利光に任せて置く事は出來ない、今日限り解雇すると云ふ事になつた。利光は當惑して、自分ほど上手に家賃を取立てる者は決してない、自分もモウ是で手を汚したのだから今更解雇せられては實に困ると哀訴する。平沼は中々聞入れそうもない。そこに寺內と古賀とが連立つて入り來る。

寺內は先日の約束どほり、黑澤男爵夫人其他の親戚が、寺內の結婚に同意を表したる手紙を持つて來たのである。平沼はそれを見て大きに喜び、緣談は是にて愈々確定となり、平沼は早速其旨を房子に知らすべく、其室を出でゆく。
利光は最前から遠慮して傍に控へて居たが、此時寺內と古賀との前に進み出で、『甚だ申兼ますが、皆さんから平沼氏に對し一言お執成が願へますまいか。實は私今解雇を申渡されたので御座いますが、宅には子供が四人もあつて實に當惑いたします。
兩人は、何うもそんな事に立入る譯には行かぬが、然し兎にかく事情を聞かうと云ふ事になる。利光は逐一事情を訴へる。若し自分が罷めて新しい人が代りに來ても、一週間たゝぬ中に平沼氏は屹度後悔するに違ない。自分ほど巧みに取立をする者は決して無い。そこに在る其の金の財布も今自分が集めて來たのだが、其中の一錢たりとも餓に泣く子供のパンの代で無いのはない。それをも自分は主人の爲に捥ちあげて來たの

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

である、絞り取つて來たのである。然るに何ぞや、自分が上さん達に泣きつかれて、段梯子の修繕の爲に五圓廿錢の支出をしたと云つて、直ぐに解雇とは餘り酷い。然し何うしてもそれが惡いと云ふなら、其五圓廿錢は自分の懐から辨償しても善いから、是非どうか詫の口添をして貰ひたいと云ふのである。

寺内『利光さんとやら、ではアナタは餓に泣く子のパンの代を掠ち取つたと云ふのですね。平沼氏が解雇を申渡されたのも當然ぢやありませんか。

利光（寺内の意外な言葉に呆れながら）『寺内さん、あなたは私が餘りに殘酷な事を仕たが爲めに解雇せられたと思召すのですが。それは全く反對です。私は殘酷の度が足りないと云つて解雇されたのです。私が假しやあの人達の身の皮を剝いで來ても、平沼氏が十分滿足と云ふ事はありますまい。凡そ倫敦中に平沼氏ほど酷い家主はありますまい。そして又私ほど上手な取立人はありますまい。

古賀『すると平沼氏の不動産は家屋ですな。借家を澤

山にお持ちなのですな。

利光『そうです、長家です、貧民長家です。長家の一室宛を、時としては半室、四半室宛を、一週間幾らで貸すのです。うまくやれば實に儲かりますよ。こんな割のいゝ者は又とありますまい。殆んど空中の一立方尺幾らと云ふ計算になるのですからな。門構の立派な借家なんぞより、此の貧民長家の室貸の方が、幾ら高い家賃に當るか知れや仕ません。

寺内『幾ら儲かつたにしても、平沼氏が其樣な財產を澤山に持て居られる事は餘り望ましくありませんね。

利光『それより外に平沼氏の財產といふ者は在りや仕ません。そして今でも少し遊金さへあれば、ドシ〳〵古家を買ひ入れて居られます。それで平沼氏の長家は倫敦中の殆んど到る處に在るのです。淺草にもあります、下谷にもあります、神田にもあります、四谷にもあります、そして其家賃を上手に取立てゝ歩くのが即ち私の役目であつたのです。

寺内『では利光さん、平沼氏の所得は總て其の借家か

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

ら上るのですね。
　利光『それより外に一文だつて在りや仕ません。（寺内はガツカリして首を垂れる。）
　古賀（幽かに嘆聲を漏して寺内に向ひ）『金を愛するは有らゆる惡事の根原だと云ふからなア。
　利光『デモ其の金の生る樹を欲しいと皆が云ひます。
　古賀『イヤ利光さん、何もあなたを責るではないが、何うも此の取立人と云ふ者は餘り善い役柄ではありませんな。
　利光『全くです、然し何も職業です。私には四人の子供がありますから。
　古賀『如何にも、そりやア御尤もです。然し平沼氏にも愛孃がありますからなア。そこが大きに恕すべき點でせう。ねえ君、そこが恕すべき點でせう。
　利光『それはそうかも知れませんが、房子孃などは實に仕合せな者です。平沼氏が房子孃を愛する爲には、世間の娘は幾人長家から追出されて居か知や仕せん。
　寺内（憤慨に堪へぬといふ面持にて）『あゝモウ厭だ。實に酷い商賣だ。利光さん、あなたも此商賣に關係してお居でになるからは、決して其罪を逃れる事は出來ませんよ。
　利光（是も憤然として）『寺内さんの御言葉ですが、若しあなたが是から房子孃と結婚なされば、矢張り此商賣に關係なさるぢやありませんか。そうすれば何うでせう、子供を養ふ爲に金を取立る人と、其金を使つて其罪を他に塗つける人と、一體何方が罪が深いでせう。
　古賀『利光さん、紳士に向つて餘んまり失禮な言葉でせう、お控へなさい。
　こゝに平沼氏出で來る。利光は小さくなつて傍に引込む。平沼は利光に向ひ、跡の事は明朝相談するから今日は此儘歸れと命じ。次に寺内に向ひ、今に直ぐ房子が來るから此處に待つて居て呉れと告げ、更に古賀を促して花園に散歩に行く。
　寺内は心中の不快抑へがたく『私今こゝで房子さんにお目に掛ることは御免蒙ります』と云ひだしたが、平沼と古賀とは寺内が恥かしがるものと思なして、ハヽヽヽヽ、ハハヽヽヽと打笑ひながら出て行く。

——（二幕目未完、次號三幕目にて終る）——

(Kono ran wa Fukao Shō ga kaku.)

Hitokuchi Banashi.

(1)

A. Sono bōshi o kimi wa ikura de kattanda e?

B. Sonna kot'a shiru mon ka; Mise-ban ga inakatta mono.

(2)

Haha. Bō ya, nandemo kyō dekiru koto wa ashita ni nobasu mon ja arimasen yo.

Musuko. Ja, okkasan, kon'ya ano kasutera o chōdai ne.

(3)

Aru hito ga hakubutsukan de Yoritomo no atama no hone to yū mono o miserareta. "Kore wa bakani chiisainda ne" to yū to, annaisha ga "sayō de gozaimasu, kore wa Yoritomo no kodomo no toki no desu."

(4)

Aru otoko ga Shina de shibarareta. Sono tsumi wa yuki o hoshite shirozatō da to itte utta no da sō de aru.

(5)

Ore no jiisan wa 100 ni natte iru to taisō jimansuru hito ga atta. Suru to mohitori no otoko ga "nanda soreppakari, ore no bāsan ga ikite ir'ya 150 o koshite'rā."

(6)

Yadoya no okami, shinki ni yatotta gejo ni mukatte, "Ohana ya, nani ka iyana koto ga attara, gozen mae ni geshiku-nin ni o-hanashi yo; sonna chiisana koto demo nen ni tsumoreba taishita chigai ni naru kara ne."

(7)

Aru suifu ga uma ni noru tote, machigatte kura o ushiro-mae ni oita. Waki no hito ga mikanete sono machigai o oshiete yaru to, suifu "Hen, dotchi e notte iku ka shirimo shinai kuse ni."

(8)

Usagi-gari ni tsurete ikareta gakusei ga usagi o odorokasu to ikenai tote hanashi suru koto o kinzerareta. Mamonaku usagi ga dete kita toki ni, gakusei wa sono ureshisa o Igilis-go de hanashita. Tsure ga kogoto o yū to, "Daredatte usagi ga Eigo o Shitteru nante omou mon ka."

改正定價

一部	金八錢
六ヶ月前金	四十二錢
一ヶ年前金	八十錢
（何れも郵税共）	

廣告料

特別一頁	十圓
普通一頁	七圓

▲本誌は毎月一回（一日）發行とす。
▲代價は小爲替を以てお送り下さい。郵券代用ならば五厘切手で一割増に願ひます。
▲御注文の時は必ず何卷何號より何號まで何册の前金と明瞭に御記載を願ひます。
▲御手紙には必ず住所姓名をハツキりとお書き下さい。又御轉居の際は新舊の宿所を併せて御通知を乞ふ。
▲本誌は前金でなくては一切御註文に應じませぬ。前金の切れた時には帶封に「前金切」と朱印を捺して上げますから御注意下さい。
▲歐米諸國よりの御注文は別に一册に付二錢づゝの郵税を申受けます。

明治四十年五月廿五日印刷
明治四十年六月一日發行

發行兼編輯人　東京府下新宿淀橋町柏木三四二　大杉榮
兼印刷人

印刷所　東京市京橋區日吉町十番地　近藤商店

發行所　東京府下新宿淀橋町柏木三四二　家庭雜誌社

大賣捌所　東京 上田屋　東京 良明堂　東海堂

Digitized by Google

Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

木下尚江著

小説 靈か肉か

（近刊）

定價未定

小説「火の柱」及び「良人の自白」に其革命的思想と熱烈火の如き筆とを示して、一躍思想界と文壇に現はれたる著者が、一旦昨の非なるを覺るや、即ち飄然筆を投じて、伊香保の山中、雲來り水往く大自然の懐に隱れ、靜思冥想、涙を垂れて神の前に祈り、初めて大膽に昨を無みし、新なる生活に移らんとして、人々の前に「懺悔」の一篇を與へたり。

爾後將に半歳、今や新らしき想と筆と熟して、新生涯の處女作「靈か肉か」は其首途を飾らんとす。誠や現代の青年が立ちて崢嶸たる前程を望むとき、足徒らに進まんとして逡巡決する所を知らざれども、世の識者學者耳を掩ふて其聲を聞かず、眼を閉ぢて其悲を見ず。著者之を思ふて自ら堪へず、今や再び筆を執つて立つ、蓋し物質的文明の弊と、精神界の暗流とを批判解剖して之を明かにし人々をして自由に其適く所に行かしめんとするなり。

原霞外講演 新派講談

舶來乞食

定價三十錢 郵税六錢

發兌元 東京々橋區五郎兵衛町廿二（振替貯金口座三八一七番） 金尾文淵堂

幸德秋水君、堺利彦君序
米國社會黨新聞記者金子喜一君著

海外より見たる社會問題

全一冊　定價金四拾錢　郵税四錢

本書は米國シカゴに於ける社會黨の日刊新聞に從事し日本の社會主義運動と米國の社會主義運動との聯鎖を爲しつゝある金子喜一君が、遠く海外より故國の社會問題を觀察し奇警なる評論を加へたるものなり海外より見たる日本の社會黨は如何、海外人の眼に映じたる日本の社會問題は如何、自稱優勝國民が海外に於ける聲價、亦其將來の活動、乞ふ本書に依て其一端を知られん事を

持原皿山著

弱者

全一冊
定價金廿五錢

發兌所　東京市本郷區弓町二丁目一　平民書房

齒科治療 自午前八時 至午後六時

神田區須田町二十六番地
齒科醫　吉瀨才市郎

勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意
書間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

眼科診察 毎日 午前

京橋南佐柄木町五
（電話新三四五八）
川上眼科院

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

小川芋錢畫
白柳秀湖著 竹久夢二畫

近刊

晩春の離愁

定價未定 洋裝美本

著者卷頭に序して曰く『わかき日の追懷ばかり寂しきはなしとかや、我は燃ゆらん青春の血を傾け盡して、東大野のさすらひに泣きぬ、噫いつの日にか再び泉の如き情熱に驅られて此歡樂に醉ひ、悲哀に泣かん』と、著者の愁ひは世紀の愁ひにして、著者の悲みは時代の悲み也。讀者は一度此書に接して生命其ものに接するが如き思ひあるべし。

發行所 京橋區尾張町七番地 隆文館

英語教授

一、本塾は日用の英語英文學及び政治法律經濟哲學宗教に關する英書の譯讀を教授するを以て目的とす
一、本塾は豫科、普通科、高等科、別科を置く
一、晝間は個人教授とし夜間は組教授とす
一、本塾は塾主山田嘉吉自ら教鞭を取り各科を教授す
一、少數の生徒を丁寧親切に教へ自由に質問を許す
一、塾主在米二十有餘年間に見聞したる書物外の智識を丁寧に講義す故に生徒は外國の學校に修學すると同じ感を持つを得
一、出來得る限り英語を以て英語の說明をなす故に早く會話に通ず
一、本塾は約千卷の英書參考書あり以て學生に便す
一、生徒の希望によりて獨、佛、西、及び羅甸語を教授す
一、規則書入用の者は郵券二錢を添へ申込む可し

麴町區三番町八十番地
山田英學塾

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

改良ローンテニス二重枠ラケット一組

一號品	一二、五〇〇
二號品	一一、〇〇〇
三號品	八、八〇〇
四號品	七、四〇〇
五號品	六、七〇〇
六號品	五、七〇〇
七號小學用	四、七〇〇
八號婦人用	六、〇〇〇
九號婦人用	七、〇〇〇

東京神田裏神保町五
S.A. 安藤商店

ピンポン室内テニス

一號	一箱	一、二三〇
二號	同	一、五〇〇
三號	同	一、六八〇
四號	同	一、八三〇

改良テニスネット

一號	一張	四間半	一、七五〇
二號	一張	五間半	二、二五〇
三號	一張	六間	二、四五〇
四號	一張	七間	二、九五〇

ゴム入フートボール

二號	一個	四、〇〇〇
三號	同	四、五〇〇
四號	同	五、〇〇〇
五號	同	五、五〇〇
六號	同	六、〇〇〇
七號	同	六、五〇〇
八號	同	七、〇〇〇

體操遊戲器械一切

東京神田裏神保町
安藤商店
電話本局四百八十四

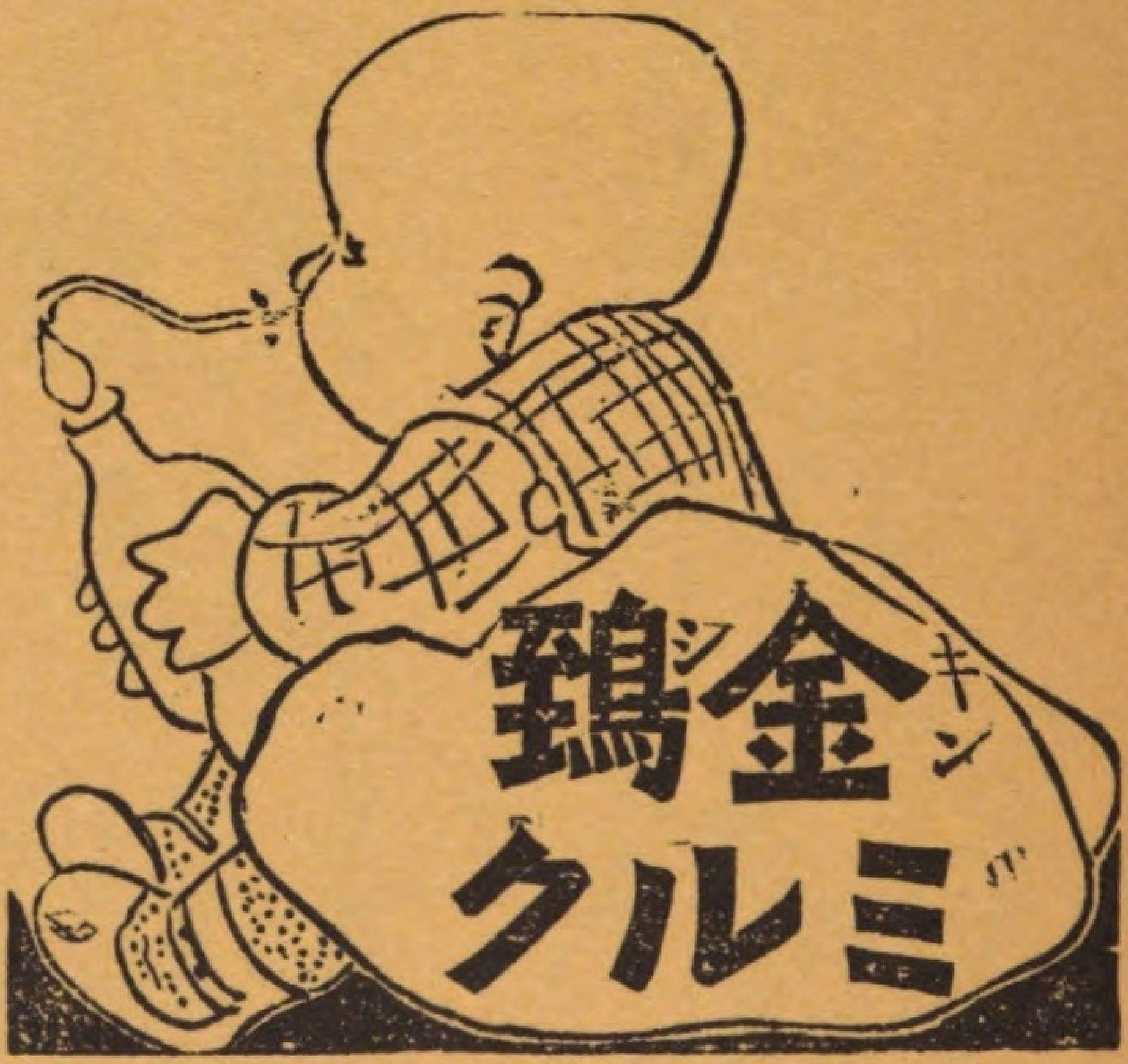
Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

製造元

花島煉乳場

伊豆國三島町

○各位の家庭の花の一層美はしからんが爲に



○遠來の輸入品よりも新鮮なる内地製煉乳を薦む

發賣元

逸見山陽堂

東京日本橋區大傳馬町一丁目

(電話浪花二一五番)

家庭雜誌第五卷第八號　明治三十六年四月五日第三種郵便物認可　明治四十年六月一日發行

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌

第五巻第九號
明治四十年七月一日發行

本號要目

尼僧の犯罪……社説―二
晩婚と婦人道德……中尾淸太郎―五
死骸に對して…有秋生―七
三坪の庭………木生―八
小説 はがき集………根津峰子―二
島の詩人………荒畑寒村―一五
強い裁縫師（お伽噺）…深尾韶―三
喜劇 貧民長屋（下）…堺利彦譯―四三
○情慾敎育○男の主張○女の主張○湯嫌ひの話○玉菜料理（山田嘉吉）○となりの和尚様○いろ〳〵の出來事等

最も進歩せる
家庭雜誌！

東京平民書房發行 本郷

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF CALIFORNIA

家庭雜誌第五卷第八號　明治三十六年四月五日第三種郵便物認可　明治四十年六月一日發行

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF CALIFORNIA